國學院大學学術情報リポジトリ

「葎の門」の「らうたげならむ人」：光源氏と花散里

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚原, 明弘, Tsukahara, Akihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000311

「葎の門」の「らうたげならむ人」
—光源氏と花散里—

塚原明弘

一、はじめに——問題提起——

須磨に落ち着いた光源氏は、都に残してきた女君たちと文を交わす。最後に紹介されるのが花散里である。

花散里も、悲しと思しけるままにかき集めたまへる御心ごころ見たまふは、をかしきも目馴れぬ心地して、いづれもうち見つつ慰めたまへど、もの思ひのもよほしぐさなめり。荒れまさる軒のしのぶをながめつつしげくも露のかかる袖かな

とあるを、げに葎よりほかの後見もなきさまにておはすらんと思しやりて、長雨に築地所どころ崩れてなむと聞きたまへば、京の家司のもとに仰せつかはして、近き国々の御庄の者など催させて仕うまつるべきよしのたまはす。

（②須磨一九六頁）[1]

「花散里」は、のちに麗景殿の女御の妹君を指すことになるが、この時点では姉妹を区別していない。ここでも「いづれも」と

あって、双方からの手紙である。歌は、家屋の荒廃を伝える。姉妹の生活は、源氏の庇護が頼りであった。源氏じしん、離京前に「荒れまさらむほど」を危惧していた（同一七四頁）。

注目されるのは、主人公の反応である。「荒れまさる軒のしのぶ（＝忍ぶ草）」に姉妹の愁訴を看取すると「葎」だけが頼りの窮状を察し、築地損壊の報に接すると在京の家司に処置を命じている。迅速である。そうさせたのが、諸注や先学に指摘はないが、「雨夜の品定め」における左馬頭の発言ではないかと思われるのである。

「雨夜の品定め」は、宮中の宿直の夜、頭中将が光源氏の行状を穿鑿して始まる。恋愛談義は、左馬頭と藤式部丞という恋の先達が加わって、中の品論に及ぶ。左馬頭の「葎の門」への言及[2]は、阿部秋生氏の三部構成説（一般論、譬喩論、経験談）に従えば、一般論の第三段にあたる[3]。理想的な恋の様態を説いて「品定め」の基調を示している。源氏も熱心に傾聴している。

さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の閉ぢられたらむこそ限りなくめづらしくはおぼえめ。いかで、はたかかりけむと、思ふより違へることなむあやしく心とまるわざなる。

（①帚木六〇頁）

世間に知られず、かわいらしい様子の姫君が、葎の茂るあばら屋に隠れ住んでいたとすれば、その意外さに魅惑されるという。

「葎の門」と「らうたげならむ人」という組み合わせが発言の要点であり、鍵語として記憶される[4]。左馬頭の発言と物語展開との関連に焦点を絞った論考が、大塚修二氏[5]と石井正己氏[6]にあるが、考察の対象は「末摘花」巻までであった。相馬知奈氏[7]と都基弘氏[8]も「葎の門」に論及しているが、左馬頭発言に注目するものではなかった。しかし、「葎の門」と「らうたげ」による和音は、言われる以上に響き続けたと思われる。本稿は、「須磨」巻を念頭に、その残響に耳をすますことによって、物語展開の方法に迫るものである。

なお、「葎」については、『源氏物語』の用例の分類整理が小町谷照彦氏にある[9]。また、本稿で「葎の門の女」というばあい、「葎の門」と「らうたげ」を兼ね備えた女性を指すことになる。

二、植物として、歌語として——忍ぶ草と葎——

忍ぶ草は羊歯類であり、「葎」は「八重葎（やえむぐら）・金葎・山葎など、山野・路傍に繁茂するつる草の総称[10]」である。「新編全集」は、「『しのぶ』よりも、荒廃の度をより強く印象づける語。花散里が源氏を慕うのに対して、源氏は彼女の生活の困窮を思いやる」（②須磨一九六頁）と注している。家屋の荒廃を象徴する植物としては、「蓬」（キク科の多年草）や「浅茅」（丈の低いチガヤ）もあるが、葎だけがつる草である。

歌語としても使い分けられている。三代集に、忍ぶ草は七例見られる。貫之の長歌（古今、巻十九、一〇〇二[11]）を例外として、「忍ぶ」に「偲ぶ」を掛ける（古今2、後撰3、拾遺1[12]）。物語と同様、遠隔地の恋人を思っているのは『古今』の二例である。

君しのぶ草にやつるゝふるさとは松虫の音ぞかなしかりける
（読人しらず、古今、巻四、二〇〇）

ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍の草ぞ生ひける
（貞登、古今、巻十五、七六九）

花散里も、源氏への思慕を「しのぶ」の掛詞で表現していた。別の語には代替できないのである。

葎にも、歌語としての特徴がある。用例は、いずれも「八重葎」。

①今さらに訪ふべき人もおもほえず八重葎して門させりてへ
（読人しらず、古今、巻十八、九七五、および拾遺、巻十二、七七五）

②八重葎心の内に深ければ花見にゆかむいでたちもせず
（貫之、後撰、巻三、一四〇）

③八重葎しげきやどには夏虫の声より外に問人もなし
（読人しらず、後撰、巻四、一九四）

④八重葎鎖してし門を今更に何にくやしくあけて待ちけん
（読人しらず、後撰、巻十四、一〇五五）

河原院にて、荒れたる宿に秋来といふ心を人〳〵詠み侍けるに

⑤八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり
（恵慶法師、拾遺、巻三、一四〇）

葎の蔓延が家屋を蔽い、門を閉ざし、生活や来客の妨げになっ

ている。虫（③）や季節（⑤）だけが訪れる。光源氏が思う「葎よりほかの後見もなきさま」も、他者の来訪や侵入を妨げる存在としての「葎」を想起していよう。「築地」の補修も、求愛者の「通ひ路」（『伊勢物語』第五段）を閉ざすためであろう。

花散里が、慕う思いを「しのぶ」に滲ませたのに対し、光源氏の意識は、荒廃に乗じる来訪者への警戒にあったのである。

三、左馬頭の発言――「葎の門の女」――

「葎」は、『源氏物語』に十三例用いられる。第一部七例、第二部一例、第三部五例。第一部と第三部に偏っている。小町谷照彦氏の分析に倣えば、次のように整理できる。[13]

(1)左馬頭の発言（①帚木六〇頁）とそれを受ける「葎の門」（末摘花二九五頁）。　計2例

(2)後見役（光源氏）不在による家屋の荒廃。須磨一例（②一九六頁）・蓬生二例（同三二九頁、三四三頁）。　計3例

(3)生活力のある人物の死後の遺族の生活。桐壺一例（①二七頁）・横笛一例（④三五七頁）。　計2例

(4)卑下や謙遜の反映。「松風」巻の明石入道の発言（②四〇四頁）。竹河一例（⑤一〇七頁）・椎本一例（同二〇二頁）。　計3例

(5)鄙びた場所の景物。宇治十帖。東屋一例（⑥九一頁）・浮舟一例（同一九〇頁）・手習一例（同三一六頁）。　計3例

(2)と(3)は、生活を支える人物の不在として統合できる。第一部の用例は(1)～(3)に多く、第三部の例はすべて(4)と(5)である。(1)左馬頭の発言に直接呼応しているのは末摘花邸の例だけだが、(2)の「蓬生」巻の二例も末摘花邸の描写であり、間接的に連なる。とすれば、「須磨」巻の当該例に左馬頭の発言の磁力が及んでいる可能性は高まる。

左馬頭発言（前掲）をふり返ろう。形容動詞「らうたげ」は、形容詞「らうたし」の語幹に接尾語「げ」がついた語。「らうたし」は、字音語「労」に「甚し」が複合したもの。「労」にもともと「いたわる・ねぎらう」の意があることから、本来、いたわりたくなる状態を「らうたし」といった。そこから、世話をしてやりたいいじらしさを表すようになった。[14] この世話をしたいという原義は、物語を展開させる駆動力になる。

「新編全集」頭注が、「葎の門の女」の「先行類型」として三つの昔物語を挙げている。[15]『伊勢物語』初段「初冠」は、昔男

が「ふる里」で思いがけず「いとなまめいたる女はらから」をかいま見る（一一三頁）。『うつほ物語』「俊蔭」巻では、若小君が「蓬、葎」もはびこる邸（①俊蔭四九頁、五一頁）で、俊蔭の娘「あやしくめでたき人」を見つけ出す（同五一頁）。『大和物語』百七十三段では、良岑宗貞が、五条辺りの「荒れたる門」「よもぎ生ひて荒れたる宿」で「たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆる」に出会う（四一八頁）。いずれも、男女の邂逅譚であるが、姫君の描写に「らうたげ」は用いられていない。「葎」が表出されるのも「俊蔭」巻だけである。「葎の門」の「らうたげならむ人」という設定は、『源氏物語』独自の組み合わせであり、二語が想起させるのは左馬頭の発言ということになる。

四、「葎の門」の末摘花

左馬頭発言を明らかに受けるのは「末摘花」巻、光源氏が姫君の醜貌に失望し、故常陸宮邸を後にするくだりである。

A　いとあはれにさびしく荒れまどへるに、松の雪のみあたたかげに降りつめる、山里の心地してものあはれなるを、かの人々の言ひし葎の門は、かうやうなる所なりけむかし、げに心苦しくらうたげならん人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや、あるまじきもの思ひは、それに紛れなむかしと、思ふやうなる住み処にあはぬ御ありさまはとるべき方なしと思ひながら、…　（①末摘花二九五頁）

荒れはてた邸から「葎の門」を想起し、なるほど、気の毒な身の上の「らうたげならん人」を住まわせて、切ない思いをしてみたいと思う。末摘花への失望は心理を倒錯させ、発見ではなく、ここに据えたいという願望に転じている。[16] 同時に、荒れ果てた家こそが理想であるという逆説的発想にいたる。「葎」は、他者の来訪を拒むと同時に男君を惹きつける両義的存在になっているのである。

「葎の門」発言の投影は「末摘花」巻の発端から始まっている。

B　いかで、ことごとしきおぼえはなく、いとらうたげならむ人のつつましきことなからむ、見つけてしがなと懲りずまに思しわたれば、　（同二六五頁）

C　いといたう荒れわたりてさびしき所に、さばかりの人の、古めかしうところせくかしづきすゑたりけむなごりなく、

いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれなることどももありけれなど思ひつづけても、ものや言ひ寄らましと思せど、うちつけにや思さむと心恥づかしくて、やすらひたまふ。（同二六九頁）

D　君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、あはれげなりつる住まひのさまなども、様変へてをかしう思ひつづけ、あらましごとに、いとをかしうらうたき人の、さて年月を重ねゐたらむ時、見そめていみじう心苦しくは、人にもて騒がるばかりやわが心もさまあしからむなどさへ、中将は思ひけり。（同二七四頁）

E　空のけしきはげしう、風吹きあれて、大殿油消えにけるを、点しつくる人もなし。かの物に襲はれしをり思し出でられて、荒れたるさまは劣らざめるを、ほどの狭う、人げのすこしあるなどに慰めたれど、すごう、うたていざとき心地する夜のさまなり。（同二九一頁）

夕顔の死の翌年、失意の主人公は、夕顔のような「いとらうたげならむ人」を見つけたいと願っている（B）。大輔命婦から、琴の琴を友に静居する故常陸宮の姫君の噂を聞く。父親の不在は、困窮を予感させる[17]。参内の帰路、荒廃した邸を尋ねる（C）。演奏を聴いたところで頭中将の鞘当てに遭い、同じ牛車で左大臣邸に向かう（D）。八月下旬の逢瀬を経て、冬の雪の朝（E）、このあと姫君の素顔を目撃して帰路につく。

「葎」は出てこないものの、荒廃が繰り返し表現される。ほかにも「荒れたる籬」（同二八〇頁）「荒れたる宿」（同二八九頁）とある。それはE「かの物に襲はれしをり」と、夕顔が亡くなった「なにがしの院」（①夕顔一五九頁）を思い出させる。

「らうたげならむ人」については、巻頭の発見願望（B）に用いられ、荒廃描写（C）を受けて、このような所にこそ「昔物語にもあはれなる事どももありけれ」と思い続け、「ものや言ひ寄らまし」と空想している。「昔物語」の語は邂逅譚の先行類型を想起させる。Dでは、頭中将もその邸に「らうたき人」の存在を妄想している。姫君を競うようになると、源氏も「心やすからむ人は、なかなかなむらうたかるべきを」「いと児めかしうおほどかならむこそ、らうたくはあるべけれ」（①末摘花二七六頁）と、想像をたくましくしている。その過程で、荒廃した邸は「あはれげなりつる住まひのさま」（D）と称揚される。妄想が肥大化し、最大限に達したとき、姫君の大きな鼻を目撃するのである。

失望したあとの感慨（A）は、物語の余韻になっている。巻

末に若紫が点描され、「いみじうらうたし」（同三〇五頁）と評されるのも同様。「葎の門」の醜女（しこめ）と二条院の「らうたげならむ人」という対照性によって、二つの要件を兼ね備えた女君の不在が確認される。末摘花の物語は、「葎の門の女」を求め、得られなかった物語だったのである。

五、「葎の門の女」の残影——末摘花の後日談——

「葎の門」の醜女という属性は、末摘花の後日談の中に残響し続ける。

光源氏離京後の末摘花邸が、「葎」に蔽われているのである。庇護下の女君たちは、男君不在のあいだ、不如意を強いられたが、末摘花はとりわけ深刻であった。紫の上や花散里と違って、帰還後も忘れ去られたのである。

F　（末摘花は）はかなきことにてもとぶらひきこゆる人はなき御身なり。ただ御兄弟（せうと）の禅師（ぜんじ）の君ばかりぞ、まれにも京に出でたまふ時はさしのぞきたまへど、それも世になき古めき人にて、同じき法師といふ中にも、たづきなくこの世を離れたる聖にものしたまひて、しげき草蓬をだにかき払はむものとも思ひよりたまはず。

かかるままに、浅茅は庭の面（おも）も見えず、しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる。葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬、牛などの踏みならしたる道にて、春夏になれば、放ち飼ふ総角（あげまき）の心さへぞめざましき。

（②蓬生三二九頁）

G　霜月ばかりになれば、雪、霰がちにて、外には消ゆる間（ま）もあるを、朝日夕日をふせぐ蓬、葎の蔭に深う積もりて、越の白山思ひやらるる雪の中に、出で入る下人（しもびと）だになくて、つれづれとながめたまふ。

（同三四三頁）

H　卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上に御暇（いとま）聞こえて出でたまふ。（中略）

大きなる松に藤の咲きかかりて月影になよびたる、風につきてさと匂ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出でたまへるに、柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり。見し心地する木立かなと思すは、はやうこの宮なりけり。

（同三四四頁）

世間から孤絶し、邸には「草蓬」「浅茅」「葎」が蔓延している

（F）。「葎は西東の御門を閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれ」という描写は、「葎」が戸締まりになる点で、「須磨」巻の花散里に対する源氏の「葎」の推測（前掲）に通じる。続く「崩れがちなるめぐりの垣」も、花散里邸の「築地所どころ崩れてなむ」に重なる。が、末摘花邸は、花散里邸と違って捨て置かれ、牧童が牛馬を放つ始末だった。Gは冬の様子。積雪と「蓬、葎」が日光を遮蔽している。FもGも情景描写である。比喩でも卑下でもない。翌年四月、光源氏は、花散里訪問の途中、見覚えのある木立に気づく（H）。「築地」の崩壊が描かれるが、この物語で「築地」が言及されるのは、花散里邸とこの二例だけである。F同様、対応の差が際立つことになる。[18]

注意したいのは、末摘花の困窮は、庇護を失った女君に共通して訪れる運命だという点である。主人公の流離にあたって、物語は、繰り返し必死の覚悟に触れている。退居を決意したあとには、永訣の不安を抱き（②須磨一六二頁）、藤壺の宮に決死の思いを吐露している（同一七九頁）。出発の際には、「わが身かくてはかなき世を別れなば、いかなるさまにさすらへたまはむ」（同一八五頁）と、紫の上の落魄を危惧し、明石からも身を案じる消息をしている（②明石二三六頁）。夢に現れた父桐壺院には「今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」（同二二九頁）と弱音を吐いている。花散里への返歌（②須磨一七五頁）を例外として、客死の可能性を常に意識していたのである。現実になれば、花散里邸も二条院も荒廃してしまう。花散里には、光源氏のほかに頼りはなく（同一六二頁）、万一には「いとど荒れまさらむほど」（同一七四頁）が思いやられる。自邸の二条院でさえ、「見るほどだにかかり、ましていかに荒れゆかん」（同一七〇頁）と案じている。杞憂ではない。平安京の最高級住宅街に位置する二条院も、桐壺の更衣の没後には荒廃し、「八重葎」が繁った（①桐壺二七頁）。末摘花邸の荒廃は、主人を失った二条院の姿でもあったのである。

末摘花の「葎」の印象は、はるか「玉鬘」巻にも見出せる。その年末、光源氏は、正月の衣装を女君の個性に応じて調え、配布しているが、二条東院の末摘花には「柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れる」を贈りつつ、「いとなまめきたれば、人知れずほほ笑まれたまふ」（③玉鬘一三六頁）という。「新編全集」頭注には「源氏は故意に末摘花にはふさわしくない立派なものを贈り、似合わないのをおかしく思う」（同頁注一一）とあるが、紋様の説明がもの足りない。「唐草」は、「絡み草」の略で、「つる草が巻きながら伸びる形を、図案化したもの」[19]である。「葎の門」に因む選択といえよう。荒廃の象徴が清新な

紋様として蘇る。光源氏は、密かな企みゆえに人知れずほほ笑んだのであろう。

左馬頭発言の磁力は「玉鬘」巻にまで及んだのである。とすれば、「品定め」の直後に展開する物語には、より強く働いていたに違いない。

六、空蟬のなかの「葎の門の女」

空蟬は、衛門督兼中納言の娘。両親の死後、老齢の伊予介の後妻になり、先妻の子紀伊守の家に滞在していた。光源氏は、「雨夜の品定め」の翌々日、方違えのために訪れた紀伊守邸で出逢い、結ばれる。執着し、弟の小君を引き取り、仲介をさせるが、空蟬は身分をわきまえ、拒みとおす。周知の物語に「葎の門の女」の印象はない。清楚な紀伊守邸は「葎の門」とは言えないし、強情な拒絶は「らうたげ」から遠い。

端緒がないわけではない。空蟬の経歴である。光源氏が目にした少年たちの素姓を尋ねると、紀伊守が小君の境遇を語っている。

「これは故衛門督の末の子にて、いとかなしくしはべりけるを、幼きほどに後れはべりて、姉なる人のよすがにかくてはべるなり。（中略）」と申す。（源氏）「あはれのことや。この姉君や、まうとの後の親」、（守）「さなむはべる」と申すに、（源氏）「似げなき親をもまうけたりけるかな。上にも聞こしめしおきて、『宮仕に出だし立てむと漏らし奏せし、いかになりにけむ』といつぞやものたまはせし。世こそ定めなきものなれ」と、いとおよすけのたまふ。（守）「不意に、かくてものしはべるなり。世の中といふもの、さのみこそ、今も昔も定まりたることはべらね。中についても、女の宿世はいと浮かびたるなむあはれにはべる」など聞こえさす。（源氏）「伊予介かしづくや。君と思ふらむな」、（守）「いかがは。私の主とこそは思ひてはべるめるを、すきずきしきことと、なにがしよりはじめて、うけひきはべらずなむ」と申す。

（帚木①九六～七頁）

幼くして父衛門督（従四位下相当）を亡くし、姉が伊予介の後妻になった縁でここにいるという。源氏は、衛門督の息女に宮仕えの話があったことをふり返る。後述によれば、中納言（従三位相当）も兼任していた（同一〇五頁）。存命であれば、現実的な話である。紀伊守は経緯を詳述しないが、「女の宿世は

いと浮かびたるなむあはれにはべる」「すきずきしきことと、なにがしよりはじめて、うけひきはべらずなむ」という感想が、推測を可能にする。伊予介は、姫君の困窮につけ込み、歳の差を顧みず、求婚したのであろう。その時、故衛門督邸は荒廃し、「葎の門」になっていたのではないか。男主人の不在は葎の荒廃に直結する。源氏も気づいたはずである。

しかも、続く場面で、光源氏は空蟬を「らうたげ」と感じている。人々が寝静まったあと忍び入り、自由を奪うと、視線は取り乱す女君を捉える。「消えまどへる気色いと心苦しくらうたげなれば、をかし」（同九九頁）。伊予介が出逢ったとき、空蟬は「葎の門の女」の要件を満たしていたことになる。源氏は遅かったのである。

女君の発言からも窺える。結ばれた直後、光源氏の恨み言に応えている。

「いとかくうき身のほどの定まらぬありしながらの身にて、かかる御心ばへを見ましかば、あるまじき我頼みにて、見直したまふ後瀬（のちせ）をも思ひたまへ慰めましを、いとかう仮（かり）なるうき寝のほどを思ひはべるに、たぐひなく思うたまへまどはるるなり。よし、今は見きとなかけそ」

（①帚木一〇二頁）

「新編全集」は、「ありしながらの身」に「中納言兼衛門督の娘として未婚でいた時のままの」（注九）と注するが、重要なのは「未婚」である。そこには、父が死に零落したあとでもせめて結婚前であったなら、という扼腕がある。源氏が最初の男性であれば、「見直したまふ後瀬」――死後の三瀬川での再会が期待できるのに、という含意が読みとれる。[20]

したがって、再訪した源氏に対する感慨の中の「過ぎにし親の御けはひとまれる古里」も、両親の死後「葎の門」と化した実家を想定していよう。

心の中（うち）には、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる古里ながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしうもやあらまし、しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、無心（むじん）に心づきなくてやみなむ、と思ひはてたり。

（①帚木一一一頁）

会話文と心中思惟の違いはあるが、いずれも空蟬の叶えられない願望が、反実仮想（二重傍線部）によって吐露されている。今となっては望むべくもない。前者の「今は見きとなかけそ」と後者の「無心に心づきなくてやみなむ」には、唇を噛む諦念が読み取れる。女君にとっても、光源氏は遅れてきた青年なのであった。「らうたげ」と表現されることもなくなる。次に空蟬をめぐって「らうたげ」が用いられるのは、拒絶という趨勢が見えたあと、稀に届く手紙の印象である（①夕顔一四六頁）。

弟の小君が、空白を埋める存在として浮上する。源氏は、「らうたげ」に見えた小君を手元に引き取り（①帚木一〇五頁）、「らうたし」と感じている（同一一七頁、一二九頁）。「らうたげならむ人」の形代になっているのである。主人公の執着は深い。

空蟬物語は、「葎の門の女」の視点によって、主人公が老受領に先を越された物語という側面が明らかになるのである。

七、夕顔のなかの「葎の門の女」

夕顔の物語も同断である。光源氏が、夏の夕暮れに出逢い、中秋の頃、誘い出した「なにがしの院」で亡くなる。旧稿で指摘したように、夕顔は、「らうたげ」によって特徴づけられる女性であった。[21] とすれば、「葎の門」が焦点になる。ただし、五条の宿に、荒廃の印象はない。源氏の感懐「玉の台も同じことなり」（①夕顔一三六頁）が、引歌経由で「八重葎」を想起させ、[22] 左馬頭発言の影響を匂わせるが、板塀に這いかかるのは、夕顔であって葎ではない。代わって注目されるのは「なにがしの院」である。

夕顔の「らうたげ」から確認しよう。最初の例は「雨夜の品定め」。頭中将が、失踪した内気な女を「この人こそはと事にふれて思へるさまもらうたげなりき」（①帚木八一頁）と回想している。次に、惟光が、探索の結果を「容貌なむ、ほのかなれど、いとらうたげにはべる」（①夕顔一四九頁）と報告している。光源氏は、報告内容から、頭中将が話していた女君ではないかと推察している（同一五〇頁）。直接対面する前に、「らうたげ」は夕顔の鍵語になっていたのである。しかも、第三者によってもたらされた。主人公は、他者の欲望を欲望することになる。

恋のはじまりは省略されているから、光源氏の視点から最初に「らうたげ」と捉えるのは、夕顔邸で初めて朝を迎え、周囲の生活音を耳にしたあとになる。

白き袷、薄色のなよよかなるを重ねて、はなやかならぬ姿いとらうたげにあえかなる心地して、そこととりたてすぐれたることもなけれど、細やかにたをたをとして、ものうち言ひたるけはひあな心苦しと、ただいとらうたく見ゆ。心ばみたる方を少し添へたらばと見たまひながら、なほうちとけて見まほしく思さるれば、「いざ、ただこのわたり近き所に、心やすくて明かさむ。かくてのみはいと苦しかりけり」とのたまへば、「いかでか。にはかならん」と、いとおいらかに言ひてゐたり。　（①夕顔一五七頁）

夕顔に「いとらうたげにあえかなる心地」を感じ、「ただいとらうたく」見つめたあと、「なほうちとけて」見たいと思い、「このわたり近き所」に誘っている。「らうたげ」の印象が「なにがしの院」への勧誘につながっているのである。

「末摘花」巻では、荒廃した末摘花邸が「なにがしの院」を想起させる（①末摘花二九一頁）。遡及して「なにがしの院」が「葎の門」と同定されるのである。とすれば、光源氏は、「夕顔の宿」の「らうたげならむ人」を「葎の門」に連れ出すことによって、「葎の門の女」を顕現させようとしたことになる。到着時の叙景には、「荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し」（①夕顔一五九頁）とある。「忍ぶ草」の最初の用例である。「須磨」巻では、「忍ぶ草」は「葎」に置き換えられる。やはり後方から、「葎の門」の印象がもたらされる。

そうであれば、初読でも、「なにがしの院」の描写の中に、「葎の門」を想起させる糸口があるのではないか。そうでなければ、「葎の門の女」の視点は不完全である。

日が昇ると、荒廃が詳述される。

いといたく荒れて、人目もなくはるばると見わたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などはことに見どころなく、みな秋の野にて、池も水草に埋もれたれば、いとけ疎げになりにける所かな。　（①夕顔一六一頁）

「葎」への言及はない。が、探索を本文外に向けると、『河海抄』以来、「なにがしの院」の准拠とされた、源融の「河原院」が浮上する。[23] 河原院は、寛平七年（八九五）の源融逝去以降荒廃していた。『古今和歌集』の紀貫之歌（巻十六、八五二）をはじめとして、『安法法師集』二四番歌や『恵慶集』一六八番歌の詞書と歌、源順の「河原院賦」（『本朝文粋』）などによって

知られる。特に元和二年（九七九）の強風が痛手であった。「なにがしの院」の描写は河原院の荒廃と重なる。[24]

そのなかで、前掲「荒れたる門の忍ぶ草茂りて」に付された『岷江入楚』の注釈が目にとまる。

河原院のさま也　私云拾遺第三秋哥に　河原院にて、あれたるやとに秋来るといふ心を人々よみ侍けるに　恵慶法師やへむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり　此哥こゝにはいらぬ事なれと事の次にかきのする者也[25]

中院通勝は、前掲恵慶歌（「八重葎」例⑤）を引いて准拠関係の傍証とするが、「此哥こゝにはいらぬ事なれと」と消極的である。継承する注釈も『源注余滴』[26]だけである。しかし、これによって河原院に「八重葎」が茂っていたことが知られ、河原院と「葎の門」が等号で結ばれる。しかも、「八重葎」から「忍ぶ草」への変換は、「しのぶ」から「葎」へという「須磨」巻の連想の前例になる。すぐれた引歌の指摘は本文解釈の更新を促すものであるが、そういう手応えを感じる。光源氏は、夕顔を「八重葎茂れる宿」に誘い出すことによって、「葎の門の女」の要件を満たそうとしたのである。『岷江入楚』の指摘は、謙辞に反して慧眼なのであった。

光源氏は、「葎の門の女」の獲得を、倒錯的に達成しようとしたことになる。左馬頭の発言が突き動かしている。「末摘花」巻の「げに心苦しくらうたげならん人をここにすゑて、うしろめたう恋しと思はばや」の先蹤である。光源氏は、夕空を眺めながら、夕顔を「よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色いとらうたし」（①夕顔一六三頁）と感じている。「なほうちとけて見まほしく思さる」（同一五七頁）という願望を適えたのである。それも束の間、女君は物の怪に襲われて急死する。

「らうたげ」は、死後のほうが印象的である。光源氏は、亡骸を「らうたげなり」（同一七二頁）、「いとらうたげなるさま」（同一七九頁）と感じる。荼毘のあとには、「らうたし」によって偲んでいる（同一八七、一八八頁）。右近も、頭中将が「いとらうたきもの」（同一八五頁）に思っていたと回想している。

夕顔の物語は、主人公が、「らうたげならむ人」を「葎の門」に据えようとして、永遠に失う物語なのであった。[27]

八、「らうたげならむ人」の発見——若紫——

夕顔の死後、光源氏にとって、生涯にわたる「らうたげならむ人」となるのが紫の上である。第一部では、「らうたし」の派生語二十一例（うち「らうたげ」六例）が用いられ、最も多い。ただし、出逢いの時点ではまだ幼く、住まいは北山の僧坊である。「葎の門の女」の印象から遠い。

しかし、巻名の「若紫」は、「葎の門の女」の先行類型、『伊勢物語』初段に由来している。[28]「北山のかいま見」の直後の感想も注目される。

あはれなる人を見つるかな、かかれば、このすき者どもは、かかる歩きをのみして、よくさるまじき人をも見つくるなりけり、たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ、とをかしう思す。さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや、と思ふ心深うつきぬ。

（同二〇九頁）

「このすき者ども」は、不特定の存在とするのが定説である[29]が、萩原広道『源氏物語評釈』の「雨夜に品定せし人々をさしていへる也」とする指摘[30]が見逃せない。左馬頭と藤式部丞は「世のすき者にて、ものよく言ひとほれる」（①帚木五八頁）と紹介されていた。「若紫」巻以前に「すき者」の用例は二例。もう一例は、夕顔の女房たちが惟光を示す例（①夕顔一五三頁）である。左馬頭提言の影響を勘案すれば、「雨夜の品定め」の先達を指す蓋然性は高くなる。「思ひの外」も、左馬頭の用いた鍵語[31]であり、「さるまじき人」は「葎の門の女」の抽象化ともいえよう。

しかも、光源氏が少女を発見するくだりで、すでに「らうたげ」が描写されている。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。

（①若紫二〇七頁）

藤壺の宮の面影に気づく直前の、第一印象が「いとらうたげ」なのである。幼くして、「葎の門の女」の要件の一つを満たしていることになる。

欠けているのは「葎の門」の要素である。尼君の僧坊には、「葎」どころか、荒廃の描写もない。が、荒廃の予感へと探索の手を伸ばすとき、祖母尼君の慨嘆が浮上する。尼君は、無邪気な孫娘を前にして「おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、」（①若紫二〇七頁）、「ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」（同二〇八頁）と嘆く。自分の死後の困窮を憂慮しているのである。そこからは、「らうたげ」な少女の、落魄して「葎の門の女」になる可能性が窺える。

若紫物語の発端は、「葎の門の女」になる前の少女を見出した物語であったといえよう。早すぎたのである。

八、むすび——再び、花散里へ——

光源氏は、左馬頭の発言に触発され、「葎の門の女」との邂逅を追求した。先行する昔物語が、意外な出逢いの物語の焼き直しであるのに対し、光源氏の青春は、熱望し、固執し、呪縛され、倒錯し、ずらされ、不首尾に終わる物語であった。

他者の欲望を欲望するという、ルネ・ジラールの「三角形的欲望（模倣的欲望）」が想起される。ジラールは、生理的行為としての「欲求」と社会的な行為としての「欲望」を区別し、後者においては、欲望の主体は、欲望の客体を直接的に欲望するのではなく、欲望の媒介を模倣しているという。[32]『源氏物語』では、三谷邦明氏が、光源氏の恋が桐壺帝を模倣している可能性を指摘し、[33]神田龍身氏が、「宇治十帖」における分身のモチーフの考察に援用している。[34]が、むしろ、「葎の門の女」に固執する物語に、「三角形的欲望」が典型的に発現しているように思われる。欲望の主体としての光源氏は、欲望の客体としての女君を直接的に欲望するのではなく、欲望の媒介としての左馬頭の発言を模倣している。だから、変更や修正はできない。「葎の門の女」を手に入れるまで、呪縛され、倒錯するしかない。固執の淵源は、「三角形的欲望」にあったといえよう。ただし、主体性の不足を問題にしているわけではない。主人公は、模倣をつうじて主体化するのである。[35]

「須磨」巻のばあいは、花散里歌の「しのぶ」から「葎」を連想し、花散里邸の「葎の門」化を警戒したのであった。「世のすき者」の標的になることへの懸念である。だからこそ、築

地の修繕を手配する。

対象は花散里にとどまらない。すでに述べたように、光源氏が客死すれば、庇護下の女君に例外なく訪れる運命である。紫の上が思いやられる。初登場以来、繰り返し「らうたげ」と表現された。実父兵部卿宮は、源氏の失脚を機に冷淡な態度に転じた（②須磨一七一～二頁）。自分以外の男にとっての「葎の門の女」になる。光源氏の反応に看取されるのは、そういう危惧である。とすれば、つづく場面のもつ意味も大きくなる。

朧月夜と朱雀帝の様子が語られる（同一九六～八頁）。朧月夜は、参内停止を解かれ、帝の寵愛を受けながら、源氏を慕い、涙を溢れさせている。帝は帝で、朧月夜を侍らせながら、感情を一方的に吐露する。源氏不在の慨嘆、父院の遺戒に背く罪悪感、源氏に対する恪気、春宮の心配等々。「須磨」巻は、源氏の身辺の出来事を基調とし、都の情報は第三者によってもたらされる。が、ここでは、兄帝の睦言や朧月夜の心中思惟が、例外的に直接表現されている。それは、主人公の危惧が現実化した光景であった。紫の上も花散里も、源氏が帰らなければ、ほかに生活の伝手を求めるしかない。

秋を迎えた源氏の詠嘆も、いよいよ心に滲みる。

須磨には、いとど心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の、関吹き越ゆると言ひけん浦波、夜々（よるよる）はげにいと近く聞こえて、またなくあはれなるものはかる所の秋なりけり。

（同一九八～九頁）

苛酷な運命が都の女君を襲っても、須磨の源氏には何もできない。命つきればなおさらである。そんな無力感を噛み締めるとき、「心づくし」や「かかる所」の語句は、配所の秋という以上に切実な響きを奏でる。「葎の門の女」が、自分の不在によって、手の届かない都で成立する。

花散里のその後が注視される。源氏は「葎の門の女」に出逢うことができるのか。姉の麗景殿の女御は、すでに「花散里」巻で「あてにらうたげなり」（②花散里一五六頁）と観察されていた。しかし、光源氏の恋愛の対象は妹君のほうである。「らうたげ」も「らうたし」も用いられていなかった。

光源氏は、「澪標」巻にいたって、帰京後初めて花散里を訪ねる。

五月雨（さみだれ）つれづれなるころ、公私（おほやけわたくし）もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。（中略）年ごろにいよいよ荒れ

まさり、すごげにておはす。女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり。（②澪標二九七頁）

「荒れまさる」が用いられている。光源氏は、姉女御との面会のあと、妹君を訪ねる。妹君は、荒廃した自邸を歌に詠む。

（花散里）水鶏だにおどろかさずはいかにしてあれたる宿に月を入れまし

（光源氏）おしなべてたたく水鶏におどろかばうはの空なる月もこそ入れ（同二九八頁）

「あれたる宿」が、恵慶歌の詞書経由で「葎の門」を想起させる。「月」は源氏を指す。逆に、光源氏歌の「うはの空なる月」は、他の求婚者を指している。ことばの戯れが、かつての憂懼を思い出させる。

光源氏が離京の思い出に触れると、女君は、帰京後も途絶えた訪れに拗ねる。

「空ながめそ」と頼めきこえたまひしをりのこともまひ出でて、「などて、たぐひあらじといみじうものを思ひ沈みけむ。うき身からは同じ嘆かしさにこそ」とのたまへるも、おいらかにらうたげなり。（同二九八～九頁）

拗ねた様子が、光源氏に「おいらかにらうたげなり」と感じられる。花散里が、はじめて「らうたげ」と表現された瞬間である。光源氏は、固執しつづけた「葎の門の女」に、ついに出逢ったのである。

注

（1）『源氏物語』『伊勢物語』『大和物語』『うつほ物語』の引用・頁は「新編古典文学全集」（小学館）による。以下「新編全集」と略称する。

（2）頭中将の発言とする説もある（「新大系」脚注）が、石井正己「さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひのほかに――昔物語を追体験する――」（「国文学」第四十五巻九号、二〇〇〇年七月）の考証（三五頁）を支持し、従来説に従う。

（3）阿部秋生『源氏物語研究序説』（東京大学出版会、一九五九）九六六～九七五頁。

（4）大塚修二「葎の門の女の物語――帚木巻から末摘花巻までの構成――」（「國學院大學大學院紀要」第五輯、一九七四）が、「葎の門」の「らうたげならむ人」という表現の組み合わせに留意している。

（5）大塚氏注（4）の論。

（6）注（2）石井氏。本稿の視点に最も近接した問題意識を展開していると思われるが、「雨夜の品定め」よりも、先行類型としての昔物語の影響に比重を置いている。

（7）相馬知奈「『源氏物語』の「門」考――「葎の門」を起点として――」（『聖心女子大学大学院論集』第二六巻第二号、二〇〇四）。『源氏物語』に描かれた「門」の場面に注目する。当該場面が、中の品の女性の邸宅か荒廃した邸宅に大別できるため、必然的に「葎の門」にも論及しているが、あくまで「門」に焦点を絞る。

（8）都基弘「『葎の門』の『つれづれ』――柏木巻における夕霧の変貌をめぐって――」（『古代文学研究（第二次）』第一四号、二〇〇五）。「柏木」巻を対象に、「夕霧が『懸想人』に仕立てられていく過程」として「葎の門」に着目している。荒廃した邸宅一般を「葎の門」と捉えたために、語句の一致に基づく引用関係を見通すにはいたらなかった。

（9）小町谷照彦「源氏物語歳時事典」（『別冊国文学・源氏物語事典』学燈社、一九八九）一二五頁。

（10）『小学館古語大辞典』（一九八三）の「葎」項。

（11）三代集の引用は、「新日本古典文学大系」（岩波書店、以下「新大系」と略称）による。番号は、「新編国歌大観」番号。『古今和歌集』は「古今」と略称。以下同様。

（12）古今、二〇〇、七六九、後撰、二八八、一一八七、一三九三、拾遺、四九九。

（13）小町谷氏注（9）の事典、一二五頁。

（14）『小学館古語大辞典』の「らうたし」項の「語誌」欄。

（15）「新編全集」①六〇頁注一一。「旧全集」は、『大和物語』百七十三段をあげていなかった。

（16）石井氏注（2）の論文、三七頁。

（17）俊蔭の死後の邸宅（『うつほ物語』①俊蔭四九、五一頁）。『源氏物語』では、父大納言と桐壺の更衣の死後の二条院（①桐壺二七頁）など。

（18）相馬氏注（7）の論文、一九三頁。

（19）『小学館古語大辞典』の「唐草」項。

（20）三瀬川の俗信については、拙稿「三瀬川を渡る時――『源氏物語』の浄土信仰――」（『源氏物語ことばの連環』おうふう、二〇〇四）参照。

（21）塚原明弘「『あやしうらうたげ』なるひと――「夕顔」巻の二つの語脈――」（『源氏物語の言語表現 研究と資料――古代文学論叢第十八輯――』武蔵野書院、二〇〇九）。「らうたげ」一〇〇例を含む「らうたし」とその派生語一九〇例のうち、この女性に対して、「らうたし」六例「らうたげ」五例、計十一例用いられている。用例検索には『源氏物語大成』索引篇（中央公論社）と「新大系」の『源氏物語索引』を利用した。

（22）『河海抄』以来「なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんなかにふたりこそねめ」（『古今和歌六帖』第六、三八七四）を引く。『河海抄紫明抄』（角川書店、一九六八）二三七頁。本文は『新編国歌大観』（角川書店）による。引歌の意義については、藪葉子「玉鬘の美の表象」（『『源氏物語』引歌の生成――『古今和歌六帖』との関わりを中心に――』笠間書院、二〇一七）参照。

（23）『河海抄紫明抄』二四五頁。

（24）河原院の荒廃と再興の変遷については、犬養廉「河原院の歌人達」（『国語と国文学』第四十四巻十号、一九六七年十月）、小林茂美「『融源氏の物語』試論」（『源氏物語論序説』桜楓社、一九七八）、増田繁夫「河原院哀史」（『源氏物語と貴族社会』吉川弘文館、二〇〇二）参照。

（25）「源氏物語古註釈叢刊」第六巻（武蔵野書院、一九八四）二五五頁。

（26）国書刊行会（一九〇六）一〇〇頁。

（27）夕顔の行動から帰納して、人物像を「らうたげ」と包括することについては疑義が提出されている。櫻井清華「性差と階級をめぐる幻想―

―帚木・空蟬・夕顔――」（『関係性の政治学Ⅰ――新時代への源氏学2――』竹林舎、二〇一四）。そうであるにも関わらず、男たちの視点から「らうたげ」と評されるところに意味がある。

(28) 三谷邦明「藤壺事件の表現構造――若紫巻の方法あるいは〈前本文〉としての伊勢物語――」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九）一七一頁。

(29) 「旧全集」と「新編全集」は「源氏の周囲の色好みの人々」（旧全①二八三頁）とし、「新潮日本古典集成」は「家来たち」とする。

(30) 「国文註釈全書」（國學院大學出版部、一九〇九）三五〇頁。大塚修二氏も支持している。大塚氏注（4）の論、一四八頁。

(31) 日向一雅「『帚木』三帖について――物語論としての「雨夜の品定め」の地平――」（『源氏物語の主題――「家」の遺志と宿世の物語の構造――』桜楓社、一九八三）一〇六、一一九頁。

(32) ルネ・ジラール『欲望の現象学――ロマンティークの虚偽とロマネスクの真実――』（古田幸男訳、法政大学出版局、一九七一）、特に第一章「《三角形的》欲望」参照。三角形とは、主体・媒介・対象の関係をさす。ジラールの三角形的欲望の理論を日本文学の分析に援用したものに、作田啓一『個人主義の運命』（岩波新書、一九八一）、西永良成『〈個人〉の行方――ルネ・ジラールと現代社会――』（大修館書店、二〇〇二）がある。

(33) 三谷邦明「帚木三帖の方法――〈時間の循環〉あるいは藤壺事件と帚木三帖――」（『物語文学の方法Ⅱ』有精堂、一九八九）参照。

(34) 神田龍身「分身、差異への欲望――『源氏物語』「宇治十帖」――」（『物語文学、その解体――『源氏物語』「宇治十帖」以降――』有精堂、一九九二）参照。

(35) 若林幹夫『社会学入門一歩前』（ＮＴＴ出版、二〇〇七）参照。人は「模倣することによって自らを主体化してゆく」（一四二頁）という。